

主 題：真の神を信じるとは

聖書箇所：列王記第一 18章16-40節

イエスはマタイの福音書7章でこのように言われました。「わたしに向かって、『主よ、主よ。』と言う者がみな天の御国にはいるのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行なう者がはいるのです。」(マタイ7:21)。続いて7:22-23には「22 その日には、大ぜいの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行なったではありませんか。』23 しかし、その時、わたしは彼らにこう宣告します。『わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。』」とあります。大変、残念で、また、恐ろしいことですが、みことばは明らかに、本当は救われていないのに、そう思い込んでいる信仰者が「大ぜい」いることを教え、そのことを警告しています。果たして、あなたは救われているのでしょうか？あなたの身にいつどのようなことが起ころうとも、あなたは「私は間違いなく天に行ける！」という揺るがない確信があるのでしょうか？また、たとえ、あなた自身はそうであっても、あなたのお子さんはどうでしょうか？あなたの家族や親しい友は、果たして、本当に救われているのでしょうか？確かに、教会には来ているし、「私は信仰をもっている」と言っているかもしれませんが、しかし、その方は本当に救われた者として、よりキリストに似た者へと変えられ続けているのでしょうか？

「神を信じる(=信仰を持つ)」とは、どういうことなのでしょう？今日、皆さんとごいっしょに学びたい聖書箇所は、エリヤがバアルの預言者たちとカルメル山上で戦ったところです。そのみことばから、私たちは「神を信じる(=信仰を持つ)」とはどういうことを意味するのか、ということを見て行きたいと思います。そうすることによって、私たちがまず、自分自身の信仰を見直し、益々、信仰者としての正しい歩みをして行くことができるようになること、そして、このエリヤのように、たとえ、自分ひとりだけであっても、大胆に神を証しできるような者になって行くことを願います。

☆神を信じる(=信仰をもつ)とはどういうことか？

I. あなたが唯一の神だけを選ぶこと 16-21節

「神を信じる」、今日のみことばが教えるその第1番目のポイントは、あなたが唯一の神だけを選ぶことです。本当の信仰、特に、聖書が教える信仰とは、あなたがいろいろな神を新しく信じて、それらを段々と付け加えて行くことではなく、すべてを捨てて、唯一の神だけを選び取ることなのです。16-21節を見ましょう。「16 そこで、オバデヤは行ってアハブに会い、彼に告げたので、アハブはエリヤに会うためにやって来た。17 アハブがエリヤを見るや、アハブは彼に言った。『これはおまえか。イスラエルを煩わすもの。』18 エリヤは言った。『私はイスラエルを煩わしません。あなたとあなたの父の家こそそうです。現にあなたがたは主の命令を捨て、あなたはバアルのあとについています。19 さあ、今、人をやって、カルメル山の私のところに、全イスラエルと、イゼベルの食卓につく四百五十人のバアルの預言者と、四百人のアシェラの預言者とを集めなさい。』20 そこで、アハブはイスラエルのすべての人に使いをやり、預言者たちをカルメル山に集めた。21 エリヤはみなの前に進み出て言った。『あなたがたは、いつまでどっちつかずによろめいているのか。もし、主が神であれば、それに従い、もし、バアルが神であれば、それに従え。』しかし、民は一言も彼に答えなかった。」

◎エリヤが訴えていること

(1) あなたは、あなた自身の神を選ばなければならない

この21節でエリヤは大切なことを民に訴えています。それは、あなたは、あなた自身の神を選ばなければならない！ということです。神がモーセを用いて、出エジプトという奇蹟をなしてくださった後、モーセにこう教えられました。それは十戒の一部ですが、出エジプト記20:3-5に「3 あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。4 あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中にあるものでも、どんな形をも造ってはならない。5 それらを拜んではならない。それらに仕えてはならない。…」とある通りです。神とは唯一なのです。日本人は「キリスト教は西洋の神様で日本には日本の神様がいる」などと言いますが、本当にそうなのでしょうか？日本には日本の神がいて、中国には中国の神、韓国には韓国の…と、もしそうなら、どうして、日本人や中国人は、また韓国人はこんなにも似ているのでしょうか？それは、アメリカ人でもどの民族でも同じです。皆、同じようなことを考え、同じような弱さを持ち、同じように感じます。だから、国が違って、文化が違って、同じ人間として分かり合えるし、助け合うことができるのです。どんなに多くの人たちが進化論を信じて、神が私たち人間を造ってくださったことを否定しようとしても、こ

の大自然を含む地球や太陽系、この宇宙が存在する理由を、すべてを造ってくださった神抜きには、誰も説明できません。すべてを造られた神がいるのです。その創造主なる神は、お一人（唯一）なのです。そのことをエリヤもここで訴えているのです。

◎アハブ王のエリヤに対する発言「イスラエルを煩わすもの」 17節

17節にはアハブ王がエリヤを見て「イスラエルを煩わすもの」と言っていますが、アハブ王は、当時、イスラエルが困難な状況に置かれていた原因をエリヤのせいに行っていることが分かります。今日の箇所は少し前から順に読んでいくと分かりますが、この当時、イスラエルは3年間の干ばつの末期にあったのです。I列王記18:1「それから、かなりたって、三年目に、次のような主のことばがエリヤにあった。『アハブに会いに行け。わたしはこの地に雨を降らせよう。』」、ヤコブ5:17にも「エリヤは、私たちと同じような人でしたが、雨が降らないように祈ると、三年六か月の間、地に雨が降りませんでした。」と記されています。どうしてこのようなことが起こったのでしょうか？エリヤははっきり、その原因について語っています。I列王記18:18に「私はイスラエルを煩わしません。あなたとあなたの父の家こそそうです。現にあなたがたは主の命令を捨て、あなたはバアルのあとについています。」とある通り、原因はアハブ王にこそある！とエリヤは言うのです。なぜなら、本来なら民の模範となるべき王が神に逆らっていたからです。神の命令を捨て、バアルという神を信仰していたことがそもそもの原因であったのです。

実は、旧約聖書には、実際に王が立てられる数百年も前に、「王の役目＝王とは、このような者でなければならぬ」と教えられている箇所があります。申命記17:18-20「:18 彼がその王国の王座に着くようになったなら、レビ人の祭司たちの前のものから、自分のために、このみおしえを書き写して、:19 自分の手もとに置き、一生の間、これを読まなければならない。それは、彼の神、主を恐れ、このみおしえのすべてのことばとこれらのおきてとを守り行なうことを学ぶためである。:20 それは、王の心が自分の同胞の上に高ぶることがないため、また命令から、右にも左にもそれることがなく、彼とその子孫とがイスラエルのうちで、長くその王国を治めることができるためである。」と。これ以外にも、ダビデ王が晩年に息子ソロモンに託したことばがI列王記2:1-3に記されています。「:1 ダビデの死ぬ日が近づいたとき、彼は息子のソロモンに次のように言いつけた。:2『私は世のすべての人の行く道を行こうとしている。強く、男らしくありなさい。:3 あなたの神、主の戒めを守り、モーセの律法に書かれているとおりに、主のおきてと、命令と、定めと、さとしとを守って主の道を歩まなければならない。あなたが何をしても、どこへ行っても、栄えるためである。』」と。このように、王とは、国が栄え守られるためにも、民の模範として、熱心に神に仕える者である必要があったのです。しかし、アハブ王はI列王記16:30-33に記されているように「:30 オムリの子アハブは、彼以前のだれよりも主の目の前に悪を行なった。:31 彼にとっては、ネバテの子ヤロブアムの罪のうちを歩むことは軽いことであった。それどころか彼は、シドン人の王エテバアルの娘イゼベルを妻にめとり、行ってバアルに仕え、それを拝んだ。:32 さらに彼は、サマリヤに建てたバアルの宮に、バアルのために祭壇を築いた。:33 アハブはアシェラ像も造った。こうしてアハブは、彼以前のイスラエルのすべての王たちにまして、ますますイスラエルの神、主の怒りを引き起こすようなことを行なった。」と、残念ながら、模範的な王ではありませんでした。それゆえに、イスラエルが干ばつに襲われ、アハブ王は、自らの身と国全体にトラブルを招いてしまったのです。

◎「バアル」という神とは？

当時、この地方では農作物豊穡の神とされていました。天候をつかさどる神で、それゆえに、農作物の出来不出来に関わると考えられていたようです。また同時に、天候をつかさどる神と考えられていたゆえに、雨を降らせたり、火を操ったりして、牛を焼くこともできると考えられていたと思われます。そのようなアハブ王に、エリヤが神からのさばきを伝えるのです。これらは、今日の箇所の出来事の3年前のことです。I列王記17:1に「ギルアデのティシュベの出のティシュベ人エリヤはアハブに言った。『私の仕えているイスラエルの神、主は生きておられる。私のことばによらなければ、ここ二、三年の間は露も雨も降らないであろう。』」とあるように、原因は、アハブ王とそれに従っている民たちにあったのです。そのような中でも感謝すべきことは、これらの困難を通して、神は私たちに教えようとしてくださっていることです。「あなたは、本当の神様を知っていますか？」と。当時のイスラエルの民たちは、この「干ばつ」といった問題を通して、自分たちの信仰、自分たちの歩んでいる方向が間違っていることを、神によって気付かされる訳なのです。「あなたの神は誰ですか？あなたが信じ、あなたが仕えようとしている神は、本当の、そして、あなたをお造りになり、すべてを支配しておられる唯一の神ですか？」ということ、問われているのです。

もし、あなたがこの神以外の神をあなた自身の神として選んでいるなら、自分自身にこのように問うてみてください。「私の神は、すべてを造られた創造主だろうか？どんなことがあっても、私を助け導いてくださるお方だろうか？私を愛してくださっているがゆえに、私の歩むべき道を示し、私がより価値のある方向に進めるように助けてくださっておられるだろうか？」と。聖書が教える神は、まさに、

そのような神です。その昔々に、世界を造られただけではないのです。今も生きておられ、私たちに関心を持ち、私たちを導き助けてくださっているのです。私たちは今、決めなければいけないのです。この唯一まことの神に従って行くことを。だれもあなたに代わって決めることはできません。これは、あなた自身が、あなた自身の選択によってなさなければならないのです。

偶像礼拝について、ヨブ記にこのように記されているところがあります。参考に見てください。ヨブ記 31 : 24-28、「:24 もし、私が金をおのれの頼みとし、黄金に向かって、私の抛り頼むもの、と言ったことがあるなら、:25 あるいは、私の富が多いので喜び、私の手が多く物を得たので、喜んだことがあるなら、:26 あるいは、輝く日の光を見、照りながら動く月を見て、:27 私の心がひそかに惑わされ、手をもって口づけを投げかけたことがあるなら、:28 これもまた裁判にかけて罰せられる罪だ。私が上なる神を否んだためだ。」

II. あなたがその神に従うこと 21-29 節

次のポイントを見て行きましょう。「神を信じる」その第 2 番目のポイントは「あなたがその神に従う」ということです。信仰とは、ただの表面的な知識や選択だけに留まるのではなく、あなたの生き方にまで影響を及ぼすものなのです。21-29 節「:21 エリヤはみなの前に進み出て言った。『あなたがたは、いつまでどっちつかずによるめいているのか。もし、主が神であれば、それに従い、もし、バアルが神であれば、それに従え。』しかし、民は一言も彼に答えなかった。:22 そこで、エリヤは民に向かって言った。『私ひとりが主の預言者として残っている。しかし、バアルの預言者は四百五十人だ。:23 彼らは、私たちのために、二頭の雄牛を用意せよ。彼らは自分たちで一頭の雄牛を選び、それを切り裂き、たきぎの上に載せよ。彼らは火をつけてはならない。私は、もう一頭の雄牛を同じようにして、たきぎの上に載せ、火をつけなくておく。:24 あなたがたは自分たちの神の名を呼べ。私は主の名を呼ぼう。そのとき、火をもって答える神、その方が神である。』民はみな答えて、『それがよい。』と言った。:25 エリヤはバアルの預言者たちに言った。『あなたがたで一頭の雄牛を選び、あなたがたのほうからまず始めよ。人数が多いのだから。あなたがたの神の名を呼べ。ただし、火をつけてはならない。』:26 そこで、彼らは与えられた雄牛を取ってそれを整え、朝から真昼までバアルの名を呼んで言った。『バアルよ。私たちに答えてください。』しかし、何の声もなく、答える者もなかった。そこで彼らは、自分たちの造った祭壇のあたりを、踊り回った。:27 真昼になると、エリヤは彼らをあざけて言った。『もっと大きな声で呼んでみよ。彼は神なのだから。きっと何かに没頭しているか、席をはずしているか、旅に出ているのだろう。もしかすると、寝ているのかもしれないから、起こしたらよかるう。』:28 彼らはますます大きな声で呼ばわり、彼らのならわしに従って、剣や槍で血を流すまで自分たちの身を傷つけた。:29 このようにして、昼も過ぎ、ささげ物をささげる時まで騒ぎ立てたが、何の声もなく、答える者もなく、注意を払う者もなかった。」

◎エリヤが訴えていること

(2) あなたは、あなた自身が選んだ神に従わなければならない

21 節で、エリヤは非常に大切なことを訴えています。「あなたが、あなた自身の神を選びなさい」と。そして、そこで終わらないのです。その次に「あなたは、あなた自身の選んだ神に従わなければならない」と教えています。私たちはよく「神さま、～してください」と祈って、神とは、さも私たちの願いを叶えてくださる存在であるかのようなイメージを持ってしまっていますが、聖書はそのようには教えません。人間の願いを叶えるために神が存在しているのではなく、神のために人間が造られ、その神に人間は従わなければならない、そのように教えるのです。なぜなら、唯一まことの神は主権者であり、造り主であり、支配者ですから、自分にとっての造り主（＝父親のような存在）がたくさんいる、自分にとっての主人が何人もいるということは明らかにおかしくないですか？信仰とは「どの神さまを信じようかな？」とか、「どの神さまが一番良いかな？」とか、「どの神さまを信じたら得かな？」というようなものではなく、この神こそが本当の神、主権者であり造り主であり支配者であるということを感じることであり、それを信じる（＝信仰を持つ）ということは、その神に完全に従うということの意味するものなのです。

たとえば、新約聖書でもこのように教えられている箇所があります。ローマ 6 : 16-18「あなたがたはこのことを知らないのですか。あなたがたが自分の身をささげて奴隷として服従すれば、その服従する相手の奴隷であって、あるいは罪の奴隷となって死に至り、あるいは従順の奴隷となって義に至るのです。:17 神に感謝すべきことには、あなたがたは、もとは罪の奴隷でしたが、伝えられた教えの規準に心から服従し、:18 罪から解放されて、義の奴隷となったのです。」、このように、私たちの救い（＝信仰）と、この神に対する従順とは決して無関係ではないのです。みことばが教えることは、あなたはこの神を信じ従うことによって、「義の奴隷」となるか、あるいは「罪の奴隷」のままにいるかのどちらかしかないということです。「いえ、私は聖書の神ではないにしろ、ちゃんとした、別の神を選び、その神の教えに従っていますから」という方がおられるかもしれません。しかし、果たして、その神は、その神の教えは、真理でしょうか？あなたはその神を、あなた自身の損得や好みで選んではおられませんか？本当の神について話している時、時々、このような答えが返ってくる場合があります。「私はこの教えに感動したんです！」とか、

「この神ならこんなことを約束してくれている」とか、あるいは「ずっと昔から、私の家の家族はこの宗教だから」と。しかし、真理というものは、私たちが感動しようがしまいが、それとは直接関係ありません。もちろん、私たちの願望や損得もしかりです。

◎バアルの預言者たちが必死に祈った様子

この箇所、エリヤとバアルに仕える預言者たちが勝負をします。雄牛を用意し、それを本当の神によって、天からの火をもって焼いていただくというのです。バアルの預言者たちが、それこそ必死になって祈ったことが記されています。(1) 26節「朝から真昼までバアルの名を呼んで…」と、恐らく朝の9時頃から真昼頃まで祈ったのでしょう。(2) 28節「彼らはますます大きな声で呼ばわり、彼らのならわしに従って、剣や槍で血を流すまで自分たちの身を傷つけた。」、自分たちの苦しみを神があわれんでくださると考えたのでしょうか？(3) 29節「このようにして、昼も過ぎ、ささげ物をささげる時まで騒ぎ立てたが、何の声もなく、答える者もなく、注意を払う者もなかった。」と、そんな苦しい祈りが、午後3時頃まで続いたと思われます。確かに、バアルの預言者たちは非常に熱心に祈りました。ある意味、それだけの努力や犠牲を払ったとも言えるかもしれません。しかし、だからと言って、それが必ず神に認められ、神がその祈りに応えてくださるかということ、それは、また別の問題です。確かに、彼らの祈りは熱心なものでした。この時だけでなく、それまでも、実に多くの犠牲が払われたことなのでしょう。しかし、残念ながら、それらは28節にあるように「彼らのならわし」であって、本当の神からの教えではなかったのです。そこには自己満足があるかもしれません。「こんなに苦しんだのだから…、こんなにも多くの犠牲を捧げたのだから！」と、でも、それが神の願っておられることでなかったらどうなのでしょう？残念なことです。だから、私たちはみことばを学ぶのです。神が何を期待し、どんなことを願っておられるのかということを知る必要があるからです。誰でも一度しかない人生を棒に振りたくはないはずです。

この21節で「あなたがたは、いつまでどっちつかずによろめいているのか。」というエリヤからの叱責が教えるように、いわゆる半従順(＝従ったり、従わなかったり)は、本当の信仰のあるべき姿ではないということ私たちに訴えています。たとえば、黙示録3：14-16でも「また、ラオデキヤにある教会の御使いに書き送れ。『アーメンである方、忠実で、真実な証人、神に造られたものの根源である方がこう言われる。：15「わたしは、あなたの行ないを知っている。あなたは、冷たくもなく、熱くもない。わたしはむしろ、あなたが冷たいか、熱いかであってほしい。：16このように、あなたはなまめろく、熱くも冷たくもないので、わたしの口からあなたを吐き出そう。』」とあります。あなたの信仰はいかがでしょう？あなたの行いは熱いでしょうか？それとも生ぬるいですか？エリヤの警告は、生ぬるい信仰で満足してしまっている者たちに対する警告でもあるのです。このように神に従うから救われるのではありません。救われたから神に従うのです。私たちに必要なことは、正しく神のみこころを知り、それに従って行くことなのです。そのためにみことばの学びは欠かせません。あなたはしっかり自分の信じ従うべき神を、また、教えを考えておられますか？「あなたがたは、いつまでどっちつかずによろめいているのか。」というエリヤのことばは、時間は無限ではない、いつか、必ず、タイムリミットが来ることを教えるのです。「いつかまた、その時になったら考えよう…」では遅いのです。今、教会に来ている今この時に、この聖書のメッセージを聞いているこの時が、神のことを考えるチャンスなのです。

Ⅲ. あなたはその神の応答を期待できる 30-40節

「神を信じる」、その意味するところの三番目のポイントは、あなたはその神からの応答を期待できるということです。信仰とは、ただの気休めや心の慰めのためにだけあるものではありません。この神は、本当に存在し、あなたを神に期待する者へと変えてくださるのです。30-40節「エリヤが民全体に、「私のそばに近寄りなさい。」と言ったので、民はみな彼に近寄った。それから、彼はこわれていた主の祭壇を建て直した。：31 エリヤは、主がかつて、「あなたの名はイスラエルとなる。」と言われたヤコブの子らの部族の数にしたがって十二の石を取った。：32 その石で彼は主の名によって一つの祭壇を築き、その祭壇の回りに、ニセアの種を入れるほどのみぞを掘った。：33 ついで彼は、たきぎを並べ、一頭の雄牛を切り裂き、それをたきぎの上に載せ、：34 「四つのかめに水を満たし、この全焼のいけにえと、このたきぎの上に注げ。」と命じた。ついで「それを二度せよ。」と言ったので、彼らは二度そうした。そのうえに、彼は、「三度せよ。」と言ったので、彼らは三度そうした。：35 水は祭壇の回りに流れ出した。彼はみぞにも水を満たした。：36 ささげ物をささげるころになると、預言者エリヤは進み出て言った。「アブラハム、イサク、イスラエルの神、主よ。あなたがイスラエルにおいて神であり、私があなたのしもべであり、あなたのみことばによって私がこれらのすべての事を行なったということが、きょう、明らかになりますように。：37 私に答えてください。主よ。私に答えてください。この民が、あなたこそ、主よ、神であり、あなたが彼らの心を翻してくださることを知るようにしてください。」：38 すると、主の火が降って来て、全焼のいけにえと、たきぎと、石と、ちりとを焼き尽くし、みぞの水もなめ尽くしてしまった。：39 民はみな、これを見て、ひれ伏し、「主こそ神です。主こそ神です。」と言った。：40 そこでエリヤは彼

らに命じた。「バアルの預言者たちを捕えよ。ひとりものがすな。」彼らがバアルの預言者たちを捕えると、エリヤは彼らをキション川に連れて下り、そこで彼らを殺した。」

◎エリヤの、神様に対する強い信頼の表れ＝12杯のかめの水

エリヤは聖書の教えている唯一まことの神を信じていました。「この神は、みこころならばどんなことでも、一見、不可能と思えるようなことでもおできになる！」と、そのような確信を持っていました。だから、彼は普通には到底考えられないようなことをするのです。天からの火をもって焼いていただくとする、その雄牛に対して、エリヤは何をしたのでしょうか？34節にあるように「**四つのかめに水を満たし**」、いけにえとそのたきぎの上に注ぐのです。しかも、それは三度もなされたのです。12杯のかめの水、これこそ、エリヤの神に対する強い信頼の表われです。

この「かめ」は、この地方の女性たちが頭に掛けて水を運んだりするような、あの大きな水がめのことであろうと思われます。干ばつで、水の貴重なこの時に、恐らく、数10リットルもの水が入るような、そんな水がめに「水を満たし」、雄牛の上にかけることができたのは、まさしく彼の信仰のゆえです。「神は、必ず、この雄牛を焼いてくださる。どんな小細工も必要ない、私の信じている神は全能であられるし、神は、もうすぐ、この干ばつも終えてくださる！」という強い確信の表れです。このようなすごいエリヤの信仰ですが、それ以上にすごいのは、その期待に込めてくださった神です。あなたがこの神を信じておられるなら、あなたもこのエリヤと同じ神を信じているのです。これこそが、聖書の教える信仰なのです。

ここでローマ4：20－22をご覧ください。「彼は、不信仰によって神の約束を疑うようなことをせず、反対に、信仰がますます強くなって、神に栄光を帰し、：21 神には約束されたことを成就する力があることを堅く信じました。：22 だからこそ、それが彼の義とみなされたのです。」、この冒頭で教えられているように、アブラハムは神を信じるという信仰によって義と認められました（＝救われた）。そして、その信じた内容について、パウロはこのように教えるのです。そこには、「神の真実さ、あるいは、全能性といったものが含まれている」、神を信じるとは、賭けをするような思いで、いずれかの神を選ばなければいけないから選んでみる、というようなものではなく、本当の信仰には神に対する強い確信、期待があるのです。なぜなら、神がその人をそのように変えてくださるからです。

ですから、聖書の教える神を信じる者たちは、お金や財産に頼らないのです。神の方がもっと期待できるからです。一見、嫌なことや思いがけないことが起こっても、神を信じている者たちは、みことばが教えるように、「いつも喜んでいよう、絶えず祈り、すべての事について感謝しよう」（Iテサロニケ5：16－18）となるのです。それもすべて、神に期待しているからです。聖書の教える神はそのような神です。状況が困難であればあるほど、あなたが神を信頼すれば信頼するほど、神はあなたに応え、神のすばらしさを現わしてく下さるのです。

◎英語の殉教者「martyr」（マター）は、ギリシヤ語の「証人」（マルチユス）から

神はエリヤの祈りに答えてくださり、生ぬるかった民たちの心と信仰を変えてくださいました。しかし、現実問題として私たちが覚えなければいけないことは、「今、同じことが起こるか？」ということ、そうではないということです。神からの新しいメッセージは終わりました。もう、必要なことはすべて、この聖書に書かれています。本当の信仰者はこの神を選び、この神に仕え、この神を自分の主人とするがゆえに、神に対して感謝と従順を捧げようとするのです。実際、これらのみことばが書かれていた最中も、その後も、信仰のゆえにいのちを落としていった殉教者がいました。実は、殉教者のことを英語では「マター（martyr）」と言うのですが、実は、このことばはギリシヤ語の証人「マルチユス」から来ているのです。彼らがいのを懸けてキリストの復活の証人として証することを選択した、その結果、多くの信者たちが、自分たちの信念のもと、殉教者となっていったのです。もし、あなたが、本当の信仰者なら、この神を愛するがゆえに、喜びをもって、従って行こうとされるはずです。

どうぞ、この1週間もそうあり続けてください。